

## 第5章

### ジャンギャリー運動にみる中央一地方関係

—1915～1920年—

#### はじめに

第一次世界大戦の勃発とともに、イラン政府は「中立宣言」を国内外に公にしたにもかかわらず、その国土はドイツ、オスマン帝国などの同盟国とイギリス、帝政ロシアなどの連合国が相争う戦場と化した。首都テヘランの中央政府の一部には、旧来この国に大きな利害関係を有してきた英露両国への従属的立場から逃れる好機とみて同盟国側に肩入れする動きもあったが、国土防衛という最も基本的な任務さえ果たしえない中央政府の無為無策ぶりはもはや覆いがたいものとなった。

このような絶望的ともいえる状況のなか、カスピ海の南西岸に位置するギーラーン州において、そこに密生する森林(ペルシア語でジャンギャル)を根拠地に、1915年後半から、侵攻するロシア軍に対し、パルチザン活動を展開し、ロシアが十月革命により戦線から撤退した後は、イランの単独支配を目論むイギリスに抗して、激しい抵抗を示したのが、ジャンギャリー運動と総称されるものである(この運動を推進した人々もまたジャンギャリーと呼ばれる)。そしてこの運動を基盤として、1920年5月に同州の主要港アンザリーに揚陸したソヴィエト赤軍の軍事力を背景に、「社会主义」を標榜する「イラン・ソヴィエト社会主义共和国」(いわゆる「ギーラーン共和国」)の樹立が宣言されたのである。

それゆえ、新生ソヴィエト外交の最初の「試練の場」として、あるいはコミニンテルンが提唱した「反帝民族統一戦線」の「実験場」として、1921年秋頃まで存続する「共和国」の目まぐるしい転変に、むしろ研究者の関心が集中し、ジャンギャリー運動は「共和国」創設に至る「前史」または「プロローグ」として描かれる場合が少なくなかった。しかし、近年P・ダイラミー<sup>(1)</sup>やC・シャーケリーがこの運動の独自の重要性にも照明を当て、研究状況は大幅に改善されるようになった。とりわけ後者の600ページに及ぶ著作<sup>(2)</sup>は、従来ヴェールに包まれていた旧ソ連の文書も含めて、利用可能な史料を網羅的に精査している点で、画期的業績と呼ぶにふさわしいものである。同書の本格的な批評は、別個の書評に譲らざるをえないが、「共和国」創立までの叙述部分を読む限り、その最大の欠点は、運動のクロノロジカルな変容の側面が十分視野に收められていない点にあるように思う。

筆者もまた数年前に当時利用できた史料に基づいてこの運動の解明を試みたことがある<sup>(3)</sup>。その結果は主として以下の3点に要約できる。(1)この運動とその指導部エッテハーデ・イスラーム (Ettehād-e Eslām, 「イスラーム統一」)委員会の思想を反映した『ジャンギャル』紙 (1917年6月創刊) の記事分析に基づけば、運動を支えていた価値意識はいわゆるパン・イスラミズムよりもむしろナショナリズムとイスラームが混在するものであった、(2)したがって、この運動は思想的にも人的にも立憲運動 (1905~11年) を継承するものであった、(3)運動を起動させた要因として地方的状況のみならず、立憲革命の挫折、および前述のごとき大戦中の中央政府の無力ぶりにも着目する必要がある、ということである。しかし同時に、筆者の研究もいくつかの弱点を抱えていた。まず、扱るべき史料の面では、第1にこれは致し方ないことではあるが、最近繽々と刊行されているペルシア語史料を使っていないこと<sup>(4)</sup>、第2に欧文公文書、ことにイギリスとロシアおよび旧ソ連のものを活用できなかつたことである。さらに、論述できなかつた大きな問題としては、この運動と中央政府との関係、また社会経済的状況との相関関係の分析が挙げられる。

そこで、本稿では、主に前回利用できなかつた史料、特にイギリス外交文

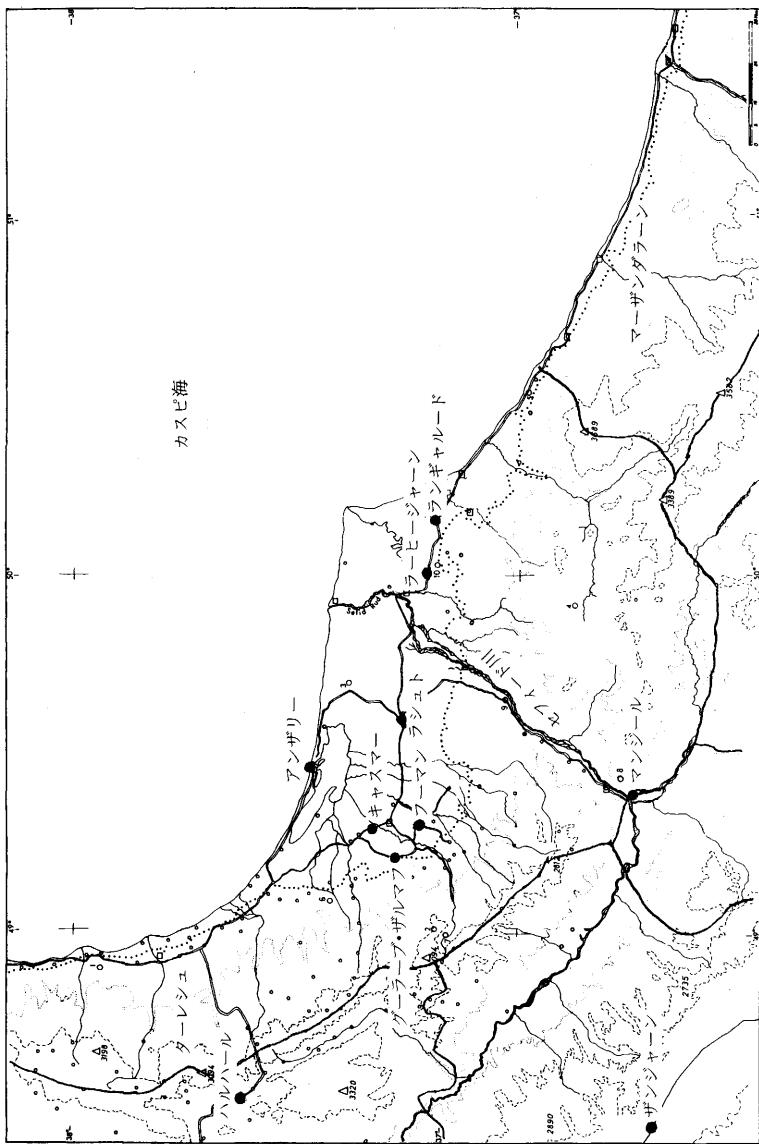
書を素材に、ジャンギャリー運動と中央政府との関係を時間軸に沿って考察することを通して、中央と地方との関係の歴史的な具体相を探究することにしたい。それはまた、「国民」(mellat)意識が大衆化する契機となった立憲革命と、この運動の鎮圧に功績を上げたコサック旅団のレザー・ハーン (Rezā Khān) がクーデタで実権を握り、後にはパフラヴィー朝のシャーとして「国民国家」建設に邁進する時期との間の、ちょうど過渡期における位相を計測する手掛かりとなるかもしれない。

## 第1節 反転攻勢：1915年後半～1917年夏

### 1. 運動の勃興

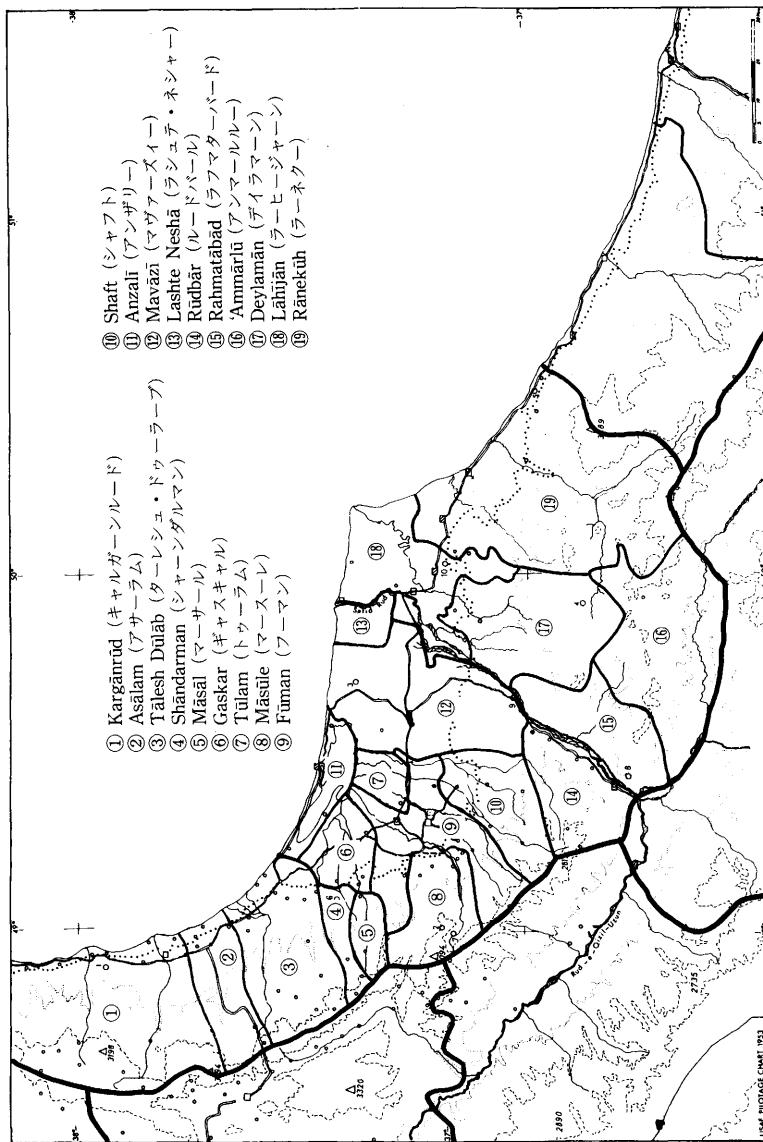
ジャンギャリー運動は、この運動のカリスマ的リーダーであり続けたミールザー・クーチェク・ハーン (Mirzā Kūchek Khān) が1915年の春にテヘランからマーザンダラーン州のコジュールを経由して、生まれ故郷のギーラーン州の州都ラシュトに秘かに帰還したことに端を発する<sup>(5)</sup>。その後、ジャンギャリーたちは拠点を同州西部のフーマン地区に移し、大戦前から進駐し、開戦後はハメダーン方面へ部隊を展開させていたロシア軍の後方を攪乱していたが、このような行動はラシュト駐在のロシア領事にいち早く察知され、1915年8月にイラン外務省に対して「ミールザー・クーチェクとその同調者を阻止する対策」を探るよう強い要請がなされた<sup>(6)</sup>。同年9月には約300名のロシア人コサックと50名ほどのイラン人コサックがジャンギャリー討伐に動員されたが、周辺の農民から部隊の動静を知らされていた60名のジャンギャリーの精銳部隊によってマースーレの近郊で包囲され、ほぼ全滅し<sup>(7)</sup>、翌年1月から再開されたロシア人コサック700名と同州北部ターレシュ地方、およびザンジャーン地方の数百名の部族騎兵隊による合同作戦もジャンギャリー勢力を四散させたものの、決定的な打撃を与えることには成功を収めなかつた<sup>(8)</sup>。

図1 ギーラーン州地図



(出所) M. Bazin et Ch. Bromberger, *Gīlān et...Azarbāyjan oriental*, Paris: Institut Français d'Iranologie de Téhéran, 1982, carte 1より作成。

図2 1910年頃のギーラーン州の地区 (boulük)



(出所) Bazin et Bromberger, *Gilan et...*, carte 2をもとに, H.L. Rabino, "Les provinces caspiennes de la Perse, le Guilan," *Revue du Monde Musulman*, Vol.32, 1915/16の記述を参考に作成。

これらの比較的規模の大きい軍事行動のほかに、ターレシュ地方、同州東部のトノカーボン地方、中部のシャフト地区の部族部隊がいく度か差し向けられたが、いずれも失敗に帰し、逆にそのことがジャンギャリーの権威や人気を高めるという皮肉な結果をもたらした。

一連の運動鎮圧の試みの掉尾を飾るものとして、元ロシア領事館書記で当時州警察長官を務めていたマファー・ヘロル・モルク (Mafakher ol-Molk) が1916年11月に敢行した軍事作戦が挙げられる。700名ほどの雑多な分子を束ねたこの遠征隊も、ジャンギャリーの本拠の一つであったフーマン地区のキャスマーのバーザールで、100名のジャンギャリーチームに払暁攻囲され、長官自ら射殺され、全部隊が壊滅するという憂き目に遭ったのだが、事件の顛末以上に興味深いのは、これに関連してラシュト市警公安部が翌年1月末から2月にかけて行なった総計58名の被疑者への取り調べである<sup>(9)</sup>。作成された尋問調書から、市警の捜査方針、つまり当時の地方当局がどのような角度からジャンギャリーを追跡しようとしていたかがある程度浮かび上がってくる。市警の捜査は、(1)ジャンギャリーの支持・協力者の割り出し、(2)ジャンギャリーへの武器・弾薬の供給・運搬ルートの摘発、(3)ラシュトの中央広場サブゼ・メイダーンにたむろする「麻薬」グループの取り調べ、(4)ジャンギャリー幹部の縁戚者の取り調べ、の4点に沿って進められたようである。それぞれの捜査方針ごとの容疑者内訳は、26人、16人、9人、7人であった。(1)と(4)の容疑者はほぼ全面的に被疑事実を否認し、刑事などの目撃証言のみに専ら頼っていたために立証は難渋をきわめているが、(2)については武器取引の要にいた人物の自白を突破口にルートの全容を解明、関係者全員を拘留している。(1)の容疑者にはキャスマー近辺の農民や小商人が多かったが、(3)の「麻薬」グループは無職者で、サブゼ・メイダーンの店に集まって朝から午後まで、ときには日没まで博打をしたり、阿片を吸飲したりしながら、「ジャンギャリーの威厳や勇敢さ」についての「根も葉もない話」に熱中し、人々を「恐怖に陥ってきた」という<sup>(10)</sup>。ここで留意しておきたいのは、彼らのようなアウトロー的な「不良分子」を惹きつけたジャンギャリーの魅力がその政治性

よりも「威厳や勇気」などの、いわばジャヴァーンマルディー（俠気）の徳性にあったことである。立憲革命の瓦解以降、この地方で絶大な権力を振るつてきたロシアとそれに追随する地方当局にあえて立ち向かうところに、この時期にジャンギャリーが「抵抗のシンボル」として人気を博した要因があつたといえよう。

かくして度重なる討伐隊の派遣を撃退するとともに、ジャンギャリーは特に親露的と目された大地主に彼らへの資金の提供を頻繁に要求した。ラシュト駐在イギリス副領事マクラーレン（C.W.B. Maclaren）の報告によれば、すでに1916年6月にフーマン地区の地主に1万2000トマーンを、翌1917年初めにはラシュト近辺の大地主に対し各々1000トマーン以上の金銭の拠出を要請した<sup>(11)</sup>。同じ副領事は同年11月にテヘランの公使に宛てて次のように報告している。

「一団 [ジャンギャリー] (以下 [ ] 内は引用者注) は月ごとに重要性と力量を獲得しつつある。ラーヒージャーン、ランギャルード、ラーネクーの地主は全体として総計20万トマーン支払うように言われている。莫大な額がラシュト在住の地主から取られている。……多額を科するほどに重要でない小地主には米1グーティー当たり——1グーティーは10タブリーズ・マシ [約33kg] に相当——1トマーンの税が徴収されている。ジャンギャリーによって徴収された総額は、今年末ではほぼ100万トマーンになるであろう。そのうち2万1000トマーンが月々給料として費やされている。」<sup>(12)</sup>

1917年末頃までに、ジャンギャリーはそれまで影響力の及んでいなかった、ラーヒージャーンやランギャルードなどのセフィード川以東の地域からも、したがってほぼギーラーン州全域から資金を調達することができたのである。しかも100万トマーンという額は1911年の州全体の徴税額23万トマーンのじつに4倍以上に上る<sup>(13)</sup>。

これらの報告の数字は多分に誇張されている可能性もあり、全幅の信頼をおけないとはいえ、有力地主から相応の資金を調達するという手法をジャンギャリーがこの時期に採用していたことは疑問の余地がない。ラシュテ・ネ

シャー地区の大地主アミーノッ・ドウレ (Mohsen Khān Amin od-Doule) の拉致・監禁事件<sup>(14)</sup>はそのような手法の突出した事例であり、とりわけこの場合土地が農民間に再分配されたことは注目に値する<sup>(15)</sup>。土地所有関係の変革そのものにジャンギャリーが決して熱心であったわけではないが、「想像だにできない暴力的手段で土地を農民から獲得した」<sup>(16)</sup>アミーノッ・ドウレのような場合には、再分配を強行することさえ辞さないことを示しているからである。このことはいわゆる「ギーラーン共和国」期に社会改革の最大の焦点となる土地の接収と再分配問題を考えるうえで見逃せない点であろう。

## 2. 地方権力機構への浸透とその背景

集積された潤沢な資金は、武器・弾薬の購入や兵士への給与支払いなどのほかに、地方行政機構に浸透し、ジャンギャリーが「公正」と見なす新しい権力構造を構築するためにも利用された。イギリス副領事のマクラーレンは、1917年1月の公使宛報告において、すでにフーマン地区の副知事がジャンギャリーから100トマーンの月給を受領し、20トマーンの月給を受ける2人の書記(monshī)と10人の守備隊を供給されていたが、一方ギャスキャル地区の副知事はジャンギャリーによって追放され、その代わりに彼らのメンバーが守備隊とともに任命されていることを記している<sup>(17)</sup>。ここにいう地区(bolūk)とは州を構成する基本的な行政区画であり(ギーラーン州の場合、当時19地区から成っていた。図2参照)，その長官は副知事(nāyeb ol-hokūme)と呼ばれ、管轄地区の民事行政全般を担当した。副知事は一般に無給であり、職務を獲得するべく州知事に金品を贈与したので、管轄地区の大地主や有力者と結託して農民を搾取する傾向にあったが、ジャンギャリーの目的は、まさに「このような副知事の数を可能な限り減らすこと」であったという<sup>(18)</sup>。しかし当然のことながらこのような旧秩序の破壊は、そこから権益を享受していた既存勢力との衝突を避けがたいものとした。特に1917年2月に、ロシア国境に隣接する最北端のキャラガーンルード地区までのターレシュ地方5地区

(khamse) のうちのシャーンダルマンとマーサールの2地区の副知事をジャンギャリーが逮捕し、彼らの代わりにジャンギャリー・メンバーを配置したことを発端に、ジャンギャリーは、この地域を基盤にする、ザルガーモッ・サルタネ (Zarghām os-Saltane : 後にアミーレ・モクタデルAmir-e Moqtaderという称号を授与される) を頂点とするシャーサヴァン系の部族勢力と全面的な戦闘状態に突入した<sup>(19)</sup>。戦闘は断続的に続いたが、同年6月末から7月初めにかけての交戦で部族勢力が大敗北を喫し、そのため7月中旬にはジャンギャリーとの間に和平が成立し、ターレシュ地方にもジャンギャリー支持者が行政・司法・軍事などの分野に漸次配置されたのである<sup>(20)</sup>。こうしてセフィード川以西を傘下に収めたジャンギャリー勢力は、さらにラシュトとそれ以東にも影響力を及ぼし始めた。マクラーレンは8月20日付の報告で皮肉まじりに次のように述べている。

「一団 [ジャンギャリー] は今やどの点からみてもギーラーンの主である。一団のリーダーたちは頻繁に町 [ラシュト] に到来し、州知事のハージー・マファーへロッ・ドウレは常に彼らと相談し、その命令を実行している。ミールザー・クーチェク・ハーンがロビン・フッドの役柄を引き受けたとはご同慶の至りである。」<sup>(21)</sup>

ところで、「抵抗のシンボル」であったジャンギャリーたちが、地方権力機構に浸透し、それを彼らの意に即したものに創り変え、事実上の「ギーラーンの主」になりえた背景として何が考えられるであろうか。もちろん、二月革命によるロシアの影響力の低減、ドイツやオスマントルコ帝国の支援などは忘れられない要因であろうし、また前述したような豊富な資金力は勢力を扶植するにあたって物質的な保障となりえたであろう。しかし、創出された新しい秩序が機能するためには、それなりの有効性を發揮することが必要であったろう。例えば、マクラーレンは、例年繰り返される、農地灌漑のための水配分をめぐる抗争がターレシュ地方でなかった理由を、ジャンギャリーが「問題を掌握し、今までになかったほど良好にそれを運営しているため」としている<sup>(22)</sup>。また「ラシュトの人々が現在すべての係争案件をミールザー・クー

チェック・ハーンの諸法廷に照会している」ことについても、その根拠を、「フーマンの諸法廷は腐敗から免れているように思えるために、ラシットの人々はフーマンに旅する不便さを十分に償えると一致して考えているようである」ことに求めている<sup>(23)</sup>。このほかにも、フーマンやキャスマーでの学校建設、幹線・支線道路の改修・建設、飢餓難民への救援活動など、地方当局がほとんど関心を払わなかった公共事業にも精力が注がれた<sup>(24)</sup>。つまり、地方権力があまりにも住民の福利を考慮に入れなかつたところに、ジャンギャリーが勢力を伸張させる素地があつたのである。後年クーチェク・ハーンと会見したイギリス副領事バッターズ (O.A. Butters) が伝える、彼の次のような発言が、そのことを端的に表しているといえよう。

「彼 [クーチェク・ハーン] はギーラーンのペルシア政府役人たちを、政府の名において人々を自己の利益のために強奪していると非難し、私も正しいと信じられる、いくつかの例を引用した。……彼は金が政府の許に届き、人々の福利のために使われるなら、人々からの徴税に反対しないが、決して国庫には納入されない税金の部分には反対している。彼はギーラーンの人々がペルシア政府の代表たちによって、反抗に駆り立てられつつあると理解しているのである。」<sup>(25)</sup>

## 第2節 「ジャンギャリー・レジーム」：1917年秋～1918年夏

### 1. 地方権力の掌握と中央政府との対峙

ジャンギャリーによるギーラーン州の権力奪取の過程をまずは一瞥しておこう。ジャンギャリーは1917年秋にラシットの州政庁内の司法局 ('adliye) と民事行政を司る市政局 (baladiye) を再編した後に、同年11月21日に州代理知事のモハーテボッ・ソルターン (Mokhāteb os-Soltān : 前州知事マファー・ロッ・ドウレの女婿) を威嚇によってテヘランに追放し<sup>(26)</sup>、12月末にはアゼル

バイジャン州のハルハールに拠点をもつシャーサヴァン族の一方の旗頭、アミーレ・アシャーエル (Amīr-e ‘Ashā’er) を彼らの傀儡の州知事に据えた。翌1918年2月までに、ジャンギャリーは、外務省の出先機関である外事代理局 (kārgozāri) を除く、ほぼすべての地方行政機関、すなわち「今や警察、司法、450名のペルシア人守備隊、パスポート局、麻薬局を管理」するに至ったのであった<sup>(27)</sup>。このような体制を、イギリス当局者たちは「ジャンギャリー・レジーム」<sup>(28)</sup>とも、あるいは中央政府にとっての「失われた州」<sup>(29)</sup>とも称したものであった。

しかし、中央政府の側は、アミーレ・アシャーエルの州知事職就任を公的に承認せず、事実上のジャンギャリーによる権力掌握に対して一段と態度を硬化させた。大戦前にテヘランで「エッテハーデ・エスラーム協会」という団体を設立した者たちの一人であったモフタシェモッ・サルタネ (Hājjī Mirzā Hasan Khān Mohtashem os-Saltane)<sup>(30)</sup>でさえ、アゼルバイジャン州知事赴任の途次にラシュトに逗留したり、ジャンギャリーの代表者に対し、「5カ月前までペルシア政府は一団を悪意ある目で眺めていなかったが、最近の彼らのやり方はテヘランの好意を寄せる者たちの支持すら受けていない」と警告を放ったほどである<sup>(31)</sup>。これに対して、ジャンギャリーの幹部たちも外事代理局長に、「テヘランは腐敗し、何もなしえていない。我々はテヘランからの命令に何らの顧慮も払わない。我々自身がテヘランで事を正すであろうし、それまでの間恐らくギーラーンの独立を宣言するであろう」と知らせ<sup>(32)</sup>、露骨に中央政府への不信を示した。

これは中央政府の支配から脱却し、地方の独立性を固持することを意味したのではなかった。というのも、ジャンギャリーが称賛の辞を惜しまなかつた政治家の一人、モストウフィーオル・ママーレク (Mirzā Hasan Mostoufi ol-Mamālek) が1918年1月に政権の座に就くと、2月初めにエッテハーデ・エスラーム委員会の特別代表として、シェイフ・アフマド・ラシュティー (Sheykh Ahmad Rashti) なる者<sup>(33)</sup>がテヘランに派遣され、首相本人をはじめ、政府高官や政党関係者との接触が図られたからである。アフマド・ラシュ

ティーが首相との個人的な面談の場で、同委員会の6項目の要求を提示したとき、そのトップには「クルディスター、ガズヴィーン、ザンジャー、マーザンダラーン、アスターーバード、シャールード、ホラーサーン[と]ヌールの諸地方の知事に、信頼でき誠実で、かつエッテハーデ・エスラーム委員会と同じ思想・信条をもつ者を任命すること」との項目が掲げられていた。同委員会の「神聖な意図」に賛意を示した首相は、しかしこの要求を「イラシの分割」に等しいものと捉え反対の意を表明したが、アフマド・ラシュティーはこれに対し、同委員会も基本的に「分割」には反対であり、ジャンギャリーの目的は「国家総体の改革とこの国土全体の独立擁護」であると応酬したのである<sup>(34)</sup>。アフマドの言わんとするところは、ジャンギャリーの影響力の波及を政府の最高指導者が事実上確認し、さらにその連携を通じて全国にその「目的」を拡げていこうというものであったろう。なぜなら、彼の首都の政治状況認識によれば、「テヘランのあらゆる人々、あらゆる階層の人々が貴委員会 [エッテハーデ・エスラーム委員会] のすべての活動を称賛している。首都制圧のチャンスを得るのに、現在ほど良いときはないと思われる」<sup>(35)</sup>が、他方であらゆる政党やグループは「空っぽの太鼓」であり、「役所の上層部は例外なく泥棒・詐欺師・追従者」<sup>(36)</sup>だからである。

後にモストウフィーオル・ママーレクはアフマド・ラシュティーに同委員会の行動や見解を支持する旨を秘密裏に伝えたようであるが、その際いくつかの留保条件をつけることも忘れなかった。なかでも重要と思われるのは、第1にジャンギャリーが「活動をギーラーンからマンジールの境域までに限定し、その境域を防衛すること」、第2に「時の知事の命令に従わないことは邪悪な部族に一つの手本を与えるため、知事には表面的に服従すること」の二つの条件である。さらに、首相は「服従」の意味を、「あなた方が知事や部局の長官の受け入れを拒まないことだ」と口頭で説明した<sup>(37)</sup>。モストウフィーオル・ママーレク政権が短命に終わったから、これらの条件が実行されたとは到底思えないが、イギリス公使コックス(P. Cox)をしてジャンギャリー運動の「生みの親」と評せしめたモストウフィー<sup>(38)</sup>でさえ、国家指導者

の立場からは地方の自立の動きに強い危機意識を抱いていたことは注目すべきであろう。

ジャンギャリーは1918年春に盛んに北部イラン一帯に代表を派遣したが、ここではマーザンダラーン州の一例を取り上げてみたい。彼らのそのような試みが全国制覇の一環であったことが明瞭に示されているからである。エッテハーデ・エスラーム委員会は5月頃に、マーザンダラーン州の2人の部族長が連合して創っていた「タバレスターン連盟」(Anjoman-e Tabarestān)の支持を得るために、代表を送り込んだ。この代表は、同連盟の「地方的な利害を全国的な利害へと変化させる」ことを目的に、部族長はじめ連盟メンバーに、「国家の不幸と荒廃の主たる原因は中央である」との確信から、「中央が変革されない限り、国内のいかなる地点における改革も無益であり、実を結ばないであろう」と言明したのである<sup>(39)</sup>。

## 2. 英露両国との関係

ジャンギャリーが帝政ロシアの後退とその空隙を埋めるかのようなイギリスの北部イランへの進出をどのように認識し、かつ実際に対処したかについては、別のところで論じたがあるので<sup>(40)</sup>、本項ではそこで論及できなかつたいくつかの問題について考えてみたい。

2万名から4万名に及ぶロシア軍が本国へ帰還すべくアンザリー港に殺到したが、彼らがその途中で犯した略奪や放火などの犯罪行為を未然に防止するため、1918年1月8日ラシュトのロシア領事館において、ジャンギャリー代表、外事代理局長、およびロシア領事と駐留ロシア将校・兵士委員会の代表などの合同会議が開催され、ジャンギャリーと駐留ロシア軍との合同警察隊を創設することが合意された。この赤い腕輪を巻いた警察隊は、隊員数こそ15名ずつで同数であったとはいえ、必要な資金と設備のすべてがジャンギャリー側によって提供されたことからも明らかのように、ジャンギャリーの主導下にある組織であった<sup>(41)</sup>。ロシア軍兵士の引揚げを統制する一方で、

ジャンギャリーはアルメニア人エイジェントを介して彼らの残した武器・弾薬を大量に買い付けた<sup>(42)</sup>。後にジャンギャリー運動から離れ、テヘランに逃亡したミールザー・レザー・ハーン・アフシャール (Mirzā Rezā Khān Afshār)<sup>(43)</sup>は、このことがいかに重要な意味をもっていたかを次のように回想している。

「我々が明確に主張できることは、ジャンギャリーがその権力、力量、安定性の大部分を、この新たなロシアの動向に負っているということである。なぜなら、ロシア軍兵士が以前のような規律と秩序を維持していたとするなら、ジャンギャリーはそのような多量の軍事物資を、わずかばかりの値段で決して入手することはできなかつたであろうからだ。」<sup>(44)</sup>

ロシアとの関連でいま一つ見過ごせない問題は、この時期におけるジャンギャリーとボリシェヴィキとの関係であろう。本国外務省からの問い合わせに応えて、イギリス公使マーリング (Ch. Marling) は、1918年4月23日付の電報で「ラシュトにはボリシェヴィキは残されていない」と確言している<sup>(45)</sup>。さらに、現場の副領事マクラーレンも同年5月21日付の電報で「ジャンギャリーとボリシェヴィキは友好的な関係はない」と報告しているが<sup>(46)</sup>、彼がここでいうボリシェヴィキとは、したがって2月にアンザリーに結成されていたロシア革命軍事委員会を指すのであろう。この委員会の議長であったチェリヤービン (Cheliabbin) なる人物は、6月28日にアンザリーでダンスター・ヴィル (L.C. Dunsterville) 将軍との会見に応じた際に、2月にはジャンギャリーを「愛国者」と表現していたにもかかわらず、このときには根絶すべき「追い剝ぎ」だとまで言い切ったという<sup>(47)</sup>。

このような対ジャンギャリー認識の変化は、ザカフカース情勢の変転と密接に連動したものと思われる。バクーのボリシェヴィキ軍とムスリム軍との確執に端を発した、ボリシェヴィキ、アルメニア部隊とムスリム部隊の衝突、その結果としての大規模なエスニック紛争の発生(1918年3月末)，その後のいわゆる「バクー・コミューン」の権力確立、オスマン軍を主役とする同盟国側のカフカース戦線での攻勢とムサヴァティストなどのムスリム・ナ

ショナリストとの協力、これらの急展開が、アルメニア武装勢力に依拠し、イギリスとの「共通の利害」を結果的に見出していたボリシェヴィキと、表向きは「イスラームの統一」を掲げ、反英的立場を堅持していたジャンギャリーとの関係を冷却させたのも自然の成り行きであった。しかも5月にアンザリーに来着した約300名のアルメニア人赤軍は、ボリシェヴィキを自称し、表面的にはジャンギャリーとも関係を保ったものの、外事代理局長の見立てによれば、イギリスの軍事力を借りて独立アルメニアを夢想するダシュナク勢力にほかならなかつた<sup>(48)</sup>。後にみると、ボリシェヴィキとの本格的な接触は、翌1919年を迎えてからのことであった。

一方、イギリスは、バグダードの参謀本部からカスピ海沿岸までの通信ラインの確保と、カフカース進出のための後方基地の構築とを目的に、2月にダンスター・ヴィル将軍指揮下の特殊部隊をアンザリーに急派したが、前述のように、ボリシェヴィキやジャンギャリーの抵抗に遭い、いったんハメダーに撤収していた。しかし同盟国側の反撃の前に、本国政府がそれまでのイラン中央政府との「和解路線」から自前の「軍事力の行使」へと方針変更を決定すると、5月頃までにガズヴィーンを本営に数千名のインド兵から成る「北部ペルシア軍」(通称Norperforce)が編制されるようになった。イギリス軍の増強という事態に直面して、ジャンギャリーは、イギリス軍のアンザリーへの前進を「国家の独立に背反する行為に属する」と反発し<sup>(49)</sup>、3月5日には、イギリスがケルマーンシャーで反英蜂起を工作中のデモクラート党の高名なリーダー、ソレイマーン・ミールザー(Soleimān Mirzā)を逮捕したことへの報復と称して、副領事のマクラーレンとペルシア帝国銀行ラシュト支店長オークショット(R.S. Oakshott)を人質に取り、キャスマーに連行、監禁した。人質確保という戦術自体は、特に銀行業務が停止し、紙幣や手形の交換が停頓したため大方の不評を買い、4月初めには人質も解放されたが、注目すべきは、このような行動が単なる報復措置であっただけでなく、中央政府がイギリスとの交渉を有利に促進するための後押しになると彼らが考えていたことである。すなわち、3月半ばにイラン内務省の指示を受けて、人質

の無条件解放を迫った外事代理局長に対し、エッテハーデ・エスラーム委員会は、人質を解放する前に、なぜ中央政府はイギリスの肝いりで組織された「南部ペルシア・ライフル隊の解体やその他のペルシアの独立を侵害する政策」に関して、イギリスと交渉に入らないのか、と逆に問い合わせを投げ返したのである<sup>(50)</sup>。

ジャンギャリー側とガズヴィーンのイギリス当局との、イギリス軍のアンザリーまでの通過をめぐる交渉は結局不調に終わり、6月にはビチエラホフ（L. Bicherakhov）大佐率いる数千名の残留ロシア軍を先陣に立てたイギリス軍との間に戦端が開かれた。ジャンギャリー部隊は、6月12日のマンジールでの戦いで一敗地に塗れ、その2日後にはビチエラホフ軍がラシュトに入城し、イギリス軍もそれに続いたものの、イギリス軍の兵力不足やジャンギャリーが得意のパルチザン戦術を探ったこともあり、その後の戦況は一進一退を重ねていた。しかし、7月20日からのジャンギャリーによるラシュト市内のイギリス領事館とイギリス軍駐屯地への一斉攻撃が失敗に終わると、8月12日にはエッテハーデ・エスラーム委員会とラシュト駐留イギリス軍当局との間に「和平条約」（Peace Treaty）が締結された。8項目から成る同条約によれば、イギリス軍側はエッテハーデ・エスラーム委員会の目的に敵対しないこと、および捕虜を相互に返還することを了承したのみであったのに対して、エッテハーデ・エスラーム委員会側はガズヴィーン～アンザリー道の開放とそこでの武力行使の禁止、ドイツ人・トルコ人士官の解雇、はてはイギリス軍側への食糧調達さえ義務づけられたのであった<sup>(51)</sup>。これは、その直前まで『ジャンギャル』紙において繰り広げられていた激しいトーンの反英プロパガンダからすると、単に軍事的に敗北したにとどまらず、運動の論理そのものが破綻したことでも意味したであろう（事実これ以降『ジャンギャル』紙は定期刊行されなくなった）。しかしながら、同時にイギリス側もジャンギャリー勢力を一方の交渉相手として認知したことによって、中央政府とジャンギャリーという一地方勢力との間で等距離を保たざるをえないジレンマに陥ったのである。

### 第3節 交渉から対決へ：1918年秋～1919年冬

#### 1. イギリスの対ジャンギャリー認識

イギリス軍の軍事的プレゼンスの前に、全国への影響力の拡大という戦略こそ一時的に頓挫を余儀なくされたとはいえ、ジャンギャリーの活動は、条約の締結から1カ月も経たないうちに再び息を吹き返したようである。それは主として中央政府の側の怠慢に起因していた。7月1日に新たにラシュトの副領事に着任したムーア (I. Moir) は公使宛てに次のように報告した。

「我々はジャンギャリーとの協定に従って [ラシュトの] 町への軍法の適用を止めたと20日も前に通告していたにもかかわらず、ペルシア政府は、私が推奨したような、本当に強力な知事を当地に送るか、または効率的で信頼に足る警察活動を組織するかのごとき手段を何ら講じることもなかったのは極めて遺憾である。

その結果、ジャンギャリーは今や再び行政管轄権を手中に收めつつあり、住民から税と寄付を徵収することを勧めている。そして人々は負担を軽減するためこれらの行為に満足の意を表明せざるをえないが、現実には恐怖と絶望の状態にある。」<sup>(52)</sup>

10月に入ると、ジャンギャリーはさらに活動領域を拡げ始めた。10月8日にアンザリー知事とその部下を腐敗行為の理由で逮捕したのを皮切りに、外国領事への事前通告抜きの外事代理局の閉鎖、アンザリーの税關やラシュトの市政局、警察局、電報局業務への容喙など、地方行政機構への関与を再び強めた<sup>(53)</sup>。また同じ頃、州税務局長に彼らのメンバーを抜擢し、地主を同局に出頭させオシュル（十分の一）税の支払い同意書を取り付けるとともに<sup>(54)</sup>、『ジャンギャル』紙特別号（1918年11月19日付）において、オシュル税は州内の有力モジュタヘドがこぞってシャリーाに照らして正当であると判断しているだけでなく、その徵収は国民議会が承認した「直接税収納の最も容易か

つ確実な方法」であることを告知している<sup>(55)</sup>。

ムーアは、このような一連のジャンギャリーの行為を、イギリスが友好関係にある中央政府（8月初めに発足したヴォスコック・ドウレ〈Hasan Khān Vothūq od-Doule〉政権）への「継続的な反乱行動」(continuous rebellious action)と見なし、「ジャンギャリーと我々との協定条項[8月の和平条約]は、政府の行政機関や税金を接収するという公然たる反乱の権利を彼らに認めるものではない」のであり、しかも和平条約を結ばざるをえなかつた「軍事情勢の必要性」はもはや存在しない、として、「和平最優先」(Peace at Any Price)という「我々の政策」の再検討を示唆した<sup>(56)</sup>。かかる見方は、ひとりムーアのみであったのではない。北部ペルシア軍付政治将校(Political Officer), ケニオン(R.L. Kennion)大佐も公使への覚書のなかで、ジャンギャリーは実態として「反乱者」であるというヴォスクの発言を引きつつ、ギーラーンの独立を企てるあらゆる行動は利敵行為だとして、和平条約の改定、または撤廃を主張していた<sup>(57)</sup>。また、アンザリー駐在の政治准将校(Assistant Political Officer), マクドネル(R. McDonell)少佐もやや控えめな表現ながらも、「イギリスの利益に反する行動を探らないよう、彼〔クーチェク・ハーン〕に友好的警告を発することが有益であろう」と上官のケニオンに進言している<sup>(58)</sup>。

これらのジャンギャリーに対する厳しいスタンスとは微妙に異なる見解を提示したのが、前出の帝国銀行ラシュト支店長、オークショットである。彼はガズヴィーンの本営へ送った書簡において、9月19日に行なわれた彼とクーチェク・ハーン、ならびに財務部門を一手に引き受けていた、第2の実力者、ハージー・アフマド・キャスマーリー(Hājjī Ahmad Kasmā'i)<sup>(59)</sup>との会見の模様を伝え、加えて自らの意見を開陳している。クーチェク・ハーンは、席上あらゆる点で中央政府との軋轢を解決する意向であり、その主旨の電報を政府へ打つことを彼に約束したという。そしてオークショット自身の判断では、エッテハーデ・エスラーム委員会が「我々と再び戦う危険性は現在のところ全くない。それどころか、彼らが巧妙な方法で扱われるならば、彼らが我々を相當に支援するであろうと信じるに足る十分な理由がある」、そ

れゆえに彼らと中央政府との交渉の推進こそが是非とも肝要なのである<sup>(60)</sup>。

オークショットの楽観的な見方は、ジャンギャリーの地方行政への干渉が顕著になった後でも、基本的に変化しなかった。10月に副領事に就任した彼は、公使への通信に添付した報告書のなかで、10月24日に再度もたれたクーチェク・ハーンとハージー・アフマドとの会見の内容を詳述している。そこでは、クーチェク・ハーンが2名のドイツ人が300頭のラクダに積載した武器・弾薬を彼の許に運んできたが、それらを没収したこと、ハルハール方面に到達した約1000名のトルコ人部隊がジャンギャリーに合流しようと望んだが、その申し出を現在厳格な中立的立場にあることを理由に拒否したこと、そして税関、道路、漁業施設などを接収するような行動を今後採らないと言明したことなどが述べられている。最後の点に関して、彼は「実際彼[クーチェク・ハーン]は当面そのような事柄に一切干渉しないであろう」とのコメントを付け加えるのである<sup>(61)</sup>。

このオークショットの報告を受けて、公使コックスはケニオンに対し、ジャンギャリー幹部の態度は「現在のところ満足のいくものである」との感想を漏らし、上述のケニオンの覚書が斟酌される前に、当時進行中であったジャンギャリー代表と中央政府との交渉の成否を見守るとの判断を下したのであった<sup>(62)</sup>。それでは、中央政府との交渉の中味とは一体何であったのか、それを次項で検討してみたい。

## 2. 中央政府との和解交渉

ヴォスコッ・ドウレは、10月初めにハージー・アーガー・シーラーズィー(Hājj Āqā Shīrāzī)なる者をジャンギャリーとの交渉のために、キャスマーに派遣していた。このときの政府側提案の主な柱は、ケニオンが首相自身から聞き出したところによれば、ギーラーン州知事はジャンギャリーと相談のうえで選ばれること、ジャンギャリー部隊は政府軍として維持され、州財政から俸給が支払われることの2点だったようである<sup>(63)</sup>。この提案をめぐる議

論がどのような結末に終わったかは不明であるが、2名のジャンギャリー代表が送られることになり、彼らは11月の初めに首都に到着し、早速政府側との交渉のテーブルについた。恐らくその議論も踏まえたうえで、11月14日政府側は以下のような交渉項目を、キャスマーにあるジャンギャリーの本部に送付した。

「中央政府の影響力は、政府が外国人とペルシア人に対し、国民的 ideals (national ideals) を達成するための現実的施策を実行するために、国家のあらゆる部分に拡げられなければならない。……

(1) エッテハーデ・エスラームによって創設された有用な制度は維持・発展されねばならない。

(2) ギーラーンにおける土地収入は、地主の収穫物取り分の10%の割合で、現物で徴収されなければならない。

(3) エッテハーデ・エスラームによってギーラーンにおいてすでに創られた部隊のうちの500人から700人に十分な月給が与えられる。支払いが定期的かつ遅滞なくなされるよう注意が払わなければならない。政府の部隊への月給は、十分の一税を基本に徴収されるギーラーンの収入からもちろん支払われよう。

(4) (脱落)

(5) 前述の部隊はすべて政府の命令下に置かれなければならない。そしてギーラーン内外での治安維持の命令は従われなければならない。部隊は政府に命じられたとき以外は、どのような問題にも干渉してはならない。上記条項に関して完全な信頼が醸成されたとき、政府は部隊を増加させ、それをより以上に活用することを試み、当該部隊は国の繁栄と福利への願望を実現する最良の手段となるであろうと理解される。」<sup>(64)</sup>

この提案で注視すべきポイントは以下の3点に集約できよう。第1に、中央政府の意思が(「国民的 ideals」という名のもとに)地方の隅々にまで貫徹すべきだという原則的立場を力説していること、第2に、ジャンギャリーが手掛けた制度やすでに実施されていたオシュル税の徴収を追認していること(た

だし、それらを実行する主体が引き続きジャンギャリーなのか、中央政府が派遣する知事以下の官吏なのかは故意か不注意か明記されていない), 第3に、2000名以上はいたと推定されるジャンギャリー部隊のうち500名から700名を当初は政府軍の一部として採用することを提起していること(ただし、不採用の部隊はどうなるのか、また採用された部隊の性格や配置もやや不明確である。ただ脱落している項目(4)に記されていた可能性もあるが)である。

この提案が出された直後の11月20日に、テヘランでジャンギャリー代表に会ったケニオンは、彼らの交渉後の反応を探っている。それによれば、彼らは中央政府との交渉はまとまらなかつたが、提案はキャスマーに持ち帰り、エッテハーデ・エスラーム委員会で検討される予定であると述べ、彼らが中央政府に行なわなければならない唯一の要求は、「政府がマジュレス〔国民議会〕を召集するための方策を講ずるべきであること」だと強調した。つまり、立憲制の再構築が確約されなかつたことが、交渉を決裂させた主因であったと推察される。ジャンギャリー幹部との連絡を絶やさなかつたオークショットも、「国民議会の開会」が和解を促進する触媒であるとの感触を彼らから得ている<sup>(65)</sup>。もう一つの焦点は、政府が受け入れる兵員数であったように思える。オークショットの見通しでは、エッテハーデ・エスラーム委員会が提出するであろう唯一の要望は、部隊の解散を防ぐために2500名から3000名を政府が受け入れることであったからである<sup>(66)</sup>。

使者の派遣や電報のやり取りを通じて断続的に交渉は続けられたが合意に至らず、1919年1月末に政府側は次のような最終提案をジャンギャリー側に提示した。

「条件(1) ペルシア政府は、以下の付帯条件に基づき、エッテハーデ・エスラームの軍隊のうちの2000名までを引き受け、採用する。

(a) 上述の2000名の移管される場所と時間に、現在個人が所持しているか、または貯蔵されている、大砲、機関銃、ライフル銃、弾薬などのすべての武器をペルシア政府に引き渡さなければならない。

(b) 引き受けられた2000名は、一部は彼ら自身の将校、一部はペルシア

政府が供給する将校によって指揮される支隊に分割されよう。

(c) 引き受けられた兵員は、政府の望むであろう場所に駐留するのであり、必ずしも現在彼らがいる場所であるとは限らない。

(d) 政府がギーラーンに必要と見なす兵員数が同地に留められ、その他は他の拠点に派遣されるであろう。

条件(2) エッテハーデ・エスラームは、それが武装部隊である限り、解散しなければならない。しかし、それがペルシアの他のそのような団体と同様に、非武装の政治結社としてラシュトの町に存在することにはペルシア政府は何らの異存もない。

条件(3) ギーラーンの議会代議士選挙は、知事が到着し次第、すぐに進められよう。

条件(4) エッテハーデ・エスラームによって設立された、すべての学校や公的施設は、ペルシア政府によって接収、維持されよう。」<sup>(67)</sup>

前掲の提案と上に引用した和解条件とを比較してみると、後者の方が明らかに条件が詳細であり、なおかつジャンギャリーにとって、より厳しいものとなっている。まず後者では、引き受ける兵員数が2000名に引き上げられてはいるものの、付帯された諸条件によって、ジャンギャリ一部隊がまるまる非武装化されたうえに、小部隊に分割され、政府の意向に従って彼らが基盤をもたない地域に移動を強いられことになり、前者の単に数百名を採用するという漠然とした条件とは、ジャンギャリーの軍事組織そのものを解体させるという意図において、格段の差があるといえよう。さらに、後者の条件(3)でジャンギャリーが要求していた国民議会の再開に向けた議員選挙を謳ってはいるが、中央から派遣された知事の主導下での選挙が想定されており、また前者にあったオシュル税徵収の正当性への言及はなされていない。前者では曖昧であった、ジャンギャリーの設置した諸制度の運営主体が中央政府だと明言されてもいる。総じていうなら、この和解条件は前のものに比べると、より対決色を鮮明に打ち出しているといえよう。

中央政府の態度がより厳しい方向に変化していくのには背景があった。

つまり、交渉の模様眺めに終始していたイギリスが、ヴォスコック・ドウレ政権との間で交渉継続中であった協定内容を一層有利にするためにも、中央政権側に明確に加担する方針へと政策転換したからであった。イギリス公使コックスは、本国外務省に宛てて、「ペルシアが自力で軍隊を再編する前に、ハメダーン～アンザリー・ライン上の我が軍が撤退したり、安全最小限度以下に削減されるなら、テヘランの状況の統制能力はエッテハーデ・エスラームと当地の過激なデモクラート分子の手に渡るであろう」と、まず駐留イギリス軍のプレゼンスが不可欠であることを説いた後に、イラン中央政府が「我が軍当局が〔ジャンギャリーとの〕条約に固守し、『中立』の態度を把持している限り、彼らは効果的なことは何もできないし、それゆえ我々の側からの何らかの積極的な協力の手立てが必要である、と認識している」と述べて、ジャンギャリーとの「和平条約」を取り消し、中央政府を後援することを示唆したのである<sup>(68)</sup>。

## 第4節 破局の淵から部分的再生へ：1919年春～1920年春

### 1. 鎮圧作戦の始動

1919年2月7日午前11時、ラシットとキャスマーの中間に位置するパスィーハーンという村で、北部ペルシア軍政治将校、ウィックカム(E.T. Wickham)はじめ、数名のイギリス軍人が、クーチェク・ハーンとの非公式の会談に臨んだ。イギリス軍がこの会談を設定した狙いは、クーチェク・ハーンを「ペルシア政府の〔和解〕条件の受諾に誘うことができないとしても、少なくとも彼の真意の吐露を引き出す」というものであった。ジャンギャリーが中央政府の条件を受け入れていないことに対し、イギリス側が遺憾の意を伝えると、クーチェク・ハーンは次のような旨的回答を行なったという。

「彼はペルシア国民を代表しているとは全く考えられない現政権には何ら

の信頼もおいていないと率直に表明し、支持者を得ている限り、決して現政権とは和解しないと断言した。彼はまた現在降伏することは過去の彼のすべての努力を水泡に帰すことであり、敗北を自認することだと付言した。

彼がマジュレスに対して、どのような態度を採るのかと尋ねられたとき、ペルシア国民——それはマジュレスによって代弁されるが——が彼に課するのが適切と見なす、あらゆる条件を喜んで受け入れようと言った。」<sup>(69)</sup>

この会見でクーチェク・ハーンに好印象を抱いたウィッカムは、過去の彼の言動から推して、国民議会が出すであろう条件に無条件的に従うという発言は、一時的な言い逃れではなく、「十分に信用に値する」と評価し、国民議会が近い将来開会されることを提言していた<sup>(70)</sup>。しかし、同人は2月末には、「ジャンギャリーの態度はここ2週間で根本的に変化してしまった」、すなわち、以前は和平条約の条項を遵守していたにもかかわらず、「最近はマンジール方面に武装部隊を送り込むことで、それを再三にわたって侵犯している」から、早急な軍事作戦の遂行が望ましいとバグダードの参謀本部に打電したのである<sup>(71)</sup>。

一方、同じ頃にラシュト駐在副領事のエルドリド (E.M. Eldrid) に会ったクーチェク・ハーンも、「イギリスに反抗する意図もないし、共和国を創る構想もなく、出世や謀反の意思もなく、単に国家の平和と繁栄を考えているだけだ」と言明しつつも、「私は善人のなかの最善ではなく、善人のなかの最悪に属するものだと考えているが、善人のなかの最悪〔彼自身〕と悪人のなかの最悪〔現政権〕との結合からは悪以外の何ものも生ずることはありえない」として、中央政府との和解の意思がないことを確認した<sup>(72)</sup>。

しかしながら、ぎりぎりの折衝は続き、ギーラーンが戦場となることを恐れたラシュト市民の代表の説得もあって、500名の部隊の受け入れ、余剰の武器・弾薬の引き渡しを条件に、5人のジャンギャリーの全権代表をテヘランに送ることをクーチェク・ハーンは認めた<sup>(73)</sup>。中央政府はしかし、彼が指揮する500名の部隊の存在自体が中央政府にとって常に不安の種になるであろ

うし、彼を監視するだけでも1000人の兵員が要るので、彼を孤立化することに成功した現在、「作戦を貫徹しないことは誤った政策であろう」との結論に達し、鎮圧作戦が口火を切ることとなつた<sup>(74)</sup>。

3月末にイギリス軍がラシュトを制圧し、夜間外出禁止や反国王・反政府演説を行なう者、あるいは武器を携帯する者の処刑などを明記した布告を発表し<sup>(75)</sup>、同市を戒厳令下に置くと同時に、キャスマー南西約20kmのグーラーブ・ザルマフの本営で約650名の正規軍を率いていたクーチェク・ハーン、キャスマーで約300名の非正規歩兵隊を指揮していたハージー・アフマド、およびラーヒージャーンに600余名の歩兵・騎兵を保有していたドクトル・ヘシュマト (Doktor Heshmat) のそれぞれに最後通牒が送られた<sup>(76)</sup>。特にクーチェク・ハーンに対しては、政府側への降伏か、メソポタミア方面への国外退去かという二者択一の通告が突き付けられた<sup>(77)</sup>。これと併行して、4月初めにはスタロセリスキ (Starosel'skii) 大佐麾下のコサック旅団の本隊がテヘランから差し向けられたのをはじめ、ハメダーンやケルマーンシャーの分隊も次々と投入された。あるイラン人コサック将校が語るところによれば、この作戦は1879年の旅団創立以来、最大規模のもので、旅団が所有するすべての火器や弾薬がギーラーン州に運搬されたという<sup>(78)</sup>。

包囲攻撃を危惧したクーチェク・ハーンは、東部方面のドクトル・ヘシュマトの部隊との連携を図るために、根拠地のフーマン地区を放棄し、アルボルズ山脈の北部山麓伝いに兵力を東部へと移動させた。このとき威力を発揮したのがイギリス軍戦闘機による空爆であった。先述のウィッカムは、長文の軍事作戦報告のなかで誇らしきに次のように語っている。

「恐らくイギリス当局が与えた支援のなかで最も貴重なものは飛行機による協力であったろう。視程が常に極端に低い、極めて困難で危険な地域上で飛行しながら、要請があったときには、必ずそれに応えたものであった。

ギーラーン全体にプロパガンダを落とすことで、私が常々育もうと努めてきた、ジャンギャリーに対する全般的な反感が一段と高められた。ラシュターバードでのセフィード川渡河中のクーチェク・ハーン部隊への空爆は、

彼らの劇的といつていいほどの崩壊をもたらすまでに至ったのである。」<sup>(79)</sup>

コサック部隊はフーマン地区を占領下に置いた後、ラーヒージャーンからマーザンダラーン境域へとクーチェク・ハーン部隊を追撃し、その部隊は四分五裂状態に陥った。また、同年2月頃から水面下で政府への帰順を画策してきたハージー・アフマドが、4月初めに約300名の親族・支持者とともに政府軍に投降、ドクトル・ヘシュマトも5月初めに約200名の部隊を帶同して自主动的に投降し、自らは処刑された。かくしてジャンギャリー運動は壊滅の淵に立たされたのである。このような状況に立ち至ったのは、もちろん戦闘機、装甲車などの近代兵器を駆使するイギリス軍の全面的な支援を得た、コサック部隊の軍事的優勢という面もあったが、同時にイラン人コサックと戦火を交えることは「兄弟殺し」に等しいとする、クーチェク・ハーンの強い信念<sup>(80)</sup>、そして部隊を数人の小隊に分けてコサックの包囲網をかいくぐり再結集を図るという戦略的な考慮があったことも見落としてはならないであろう。いずれにせよ、クーチェク・ハーンその人を捕獲できなかったとはいえ、上掲の軍事作戦報告中で、ウィッカムが「ジャンギャリーの脅威は終焉し、彼らの勢力は粉砕された。ギーラーンにかつての富と繁栄を回復させるためには、少数の部隊に支援された、確固とした公正な知事が必要なだけである」と述べるように、6月までには作戦はほぼ完了したように思えた。

## 2. 運動の再興と和解交渉の再開

事態はしかしながら、ウィッカムが予見したようなシナリオどおりには進行しなかった。早くも1919年7月頃から、コサック部隊との戦闘において頭角を現したエフサーノッラー・ハーン (Ehsānollāh Khān) やハールー・ゴルバーン (Khālū Qorbān)<sup>(82)</sup>らの率いるゲリラ部隊が、頻繁にコサック駐屯所を襲撃し始めたからである<sup>(83)</sup>。また一方で、ロシアの内戦でボリシェヴィキが優位を占めつつあるという状況下で、7月終わりから1カ月近くかけてクー

チェック・ハーン自身がボリシェヴィキと連絡を取るためにレンコラーンに赴いたり<sup>(84)</sup>、甥のエスマール・ハーン (Esmā'il Khān) をボリシェヴィキとの交渉のためにバクーやティフリスに出張させたり<sup>(85)</sup>、さらにはボリシェヴィキの代表者や活動家がクーチェク・ハーンの許を訪問する<sup>(86)</sup>など、以前にも増して、ボリシェヴィキとの協力関係を模索する試みが強められた。

かくしてジャンギャリーの勢力は、10月頃までに400名程度にまで回復した<sup>(87)</sup>が、しかし政府軍との力関係では両者とも決め手がなく、膠着状態が続いている。その模様を、北部ペルシア軍政治将校、エドモンズ (C.J. Edmonds) は以下のように観察した。

「知事側の立場が満足といえないのと同様、ジャンギャリーも有利な位置にあるとは到底いえない。なるほど、村民はコサック兵の専横と、地主の重税の代わりにクーチェク・ハーンにわずかばかりの寄付を行なえばよいことから、彼らを好んでいるが、彼らは家族から切り離されて、次から次へと追い立てられることにうんざりしている。……それゆえ状況は簡単にいえば、ジャンギャリーも悪い方向にあるが、さりとて知事側も『最期のとどめ』を刺すことができない、ということである。知事とコサック司令官は、コサックが作戦を完遂する希望をもてないし、またそうするための計画ももっていないことを認めている。」<sup>(88)</sup>

現場の状況により精通していたエルドリドは、エドモンズ以上に悲観的な印象を抱いていた。「地主階層は状況に対応する知事当局の力にほとんど信頼を寄せていないし、農民は諸地区でのコサック兵の専横ゆえに知事サイドからすっかり遊離してしまった」と現状を捉えたうえで、彼はクーチェク・ハーンの人気回復を裏づける好例として、夜間秘かにクーチェク・ハーンがグーラーブ・ザルマフを訪れたおりに、「農機具で武装した数百名の農民が彼を激励し、コサック兵の専横の仔細を彼に打ち明けた」ことを挙げている<sup>(89)</sup>。

いずれにせよ、こうした行き詰まり状態を打開するためには、中央政府の意を体した知事側とジャンギャリーとの和解交渉が再開されねばならなかつた。交渉は11月頃から始められたが、ジャンギャリー側が武器・弾薬の引き

渡しを拒んだために難航していた。しかし、翌1920年1月には基本的な枠組みが、そして2月にはそれに3項目の付帯条項が追加されたうえで、代理知事アフマド・ハーン・アーザリー（Ahmad Khān Ādhari）を仲介に中央政府とジャンギャリーとの間でほぼ合意に達した。この合意文書は、中央政府とジャンギャリーとの関係がこの時期に到達していた地点を測定するうえで重要であり、それゆえ少々長くなるが全文を以下に引用しておきたい。

「イラン政府の命を受けたギーラーン州代理知事アフマド・ハーン・アーザリー氏とミールザー・クーチェク・ハーン氏との間の協定原文

(1) この協定署名以降、ミールザー・クーチェク・ハーン氏と彼の同志・支持者は、イラン政府への敵対を止め、イラン国首相、ヴォスコッ・ドウレ氏に自己の運命を委ね、政府の諸命令に従うであろう。

(2) ミールザー・クーチェク・ハーン氏と、上記条件に従う、彼のすべての同志・支持者は、生命・財産が保障され、彼らの身体・財産は、政府および政府役人による、あらゆる侵害からも免れよう。

(3) ミールザー・クーチェク・ハーン氏とジャンギャリー組織への加担・同調・支持の罪科で政府により拘留・逮捕・追放処分を受けている者はすべて釈放されよう。彼らの過去の罪状ゆえに生命・財産が侵害されることは禁じられよう。

(4) ミールザー・クーチェク・ハーン氏は、彼の国民への奉仕の前歴に鑑み、常に尊敬の眼差しで見られ、国民への奉仕を続けるために、ギーラーンにおける教育問題を監視し、促進するよう努めることが要請されよう。

(5) 現在の指導者が受けた実際の被害は、政府が救済するであろう。この被害の額は、アフマド・ハーン・アーザリー氏とミールザー・クーチェク・ハーン氏との間で決定されよう。

(6) 彼の武装組織は、ジャンダルメリの名のもとに保たれ、ギーラーンにおいて知事の命令下で職務に従事しよう。

(7) この部隊の長官職については、アフマド・ハーン・アーザリー氏が推薦するであろう長官がテヘランから任命されよう。この部隊の俸給は政

府によって月々支払われよう。

(8) フーマン地区とシャフト地区の道路建設利権は、政府が認可するであろう別の利権状によって、政府側からハサン・ハーン・モイーノッ・ラアーヤー氏に与えられよう。

1338年ジャディー月29日 [1920年1月20日]

ギーラーン州代理知事 アフマド・アーザリー

ギーラーン州代理知事アーザリー氏とミールザー・クーチェク・ハーン氏との間に結ばれた協定の条項(6)と(7)を容易にするために、以下の条項が1338年ジョマーダーII月6日 [1920年2月27日] に追加される。

(1) ジャンギャリーのすべての兵士は、ジャンダルメリーの名のもとに、ジャンダルメリーの規則に従い、ミールザー・クーチェク・ハーン氏の指揮下で、政府と知事から出される諸命令をギーラーン地方において遂行する。

(2) 前述の兵士の教練のために、ミールザー・クーチェク・ハーン氏の許可を得て、数名のジャンダルメリー将校が任命され、彼らは部隊の本拠であるフーマンですぐさま仕事に着手しよう。

(3) すべての兵士は、[政府] 軍撤退の3日後に、フーマンに出頭し、知事の監督下で名前を登録し、組織を開始しよう。

アフマド・アーザリー」<sup>(90)</sup>

ところで、シャーケリーは、この協定がイギリスが1918年の夏に、そしてテヘランのロシア人コサック司令官が1919年9月に行なった提案に比べて、著しく不利であるにもかかわらず、なぜクーチェク・ハーンが受諾したのかを自問して、一つには勢力を樹木が葉をつける春まで温存するための「時間稼ぎ」のためか、またあるいはボリシェヴィキ到来への期待または密約があつたためであろうと推測している。この推測はジャンギャリーがこの協定を一切実行しなかったから一層蓋然性が高いとも指摘している<sup>(91)</sup>。筆者もそのような可能性を一概に否定するものではないが、この説にはいくつかの難点が

あるように思える。

その第1は、彼が前提にしている、この協定がジャンギャリーにとって不利なものであるという点である。1918年夏のイギリスの提案とは恐らくストークス (C.B. Stokes) 中佐との交渉を指すのであろうが、外国人が行なった提案をそもそもイランの中央政府のそれと同一レヴェルで論じができるのかどうかという根本的問題にはさしあたり目をつぶるとしても、イギリス軍にギーラーンの通過を認める代わりにジャンギャリーに国内政治へのフリーハンドを認めるというこの提案は、いずれにせよイギリス軍との戦闘に突入する以前のものであり、政府軍によって窮地に追い込まれていた時点での協定と比較すること自体にそもそも無理がある。またコサック司令官の提案は、降伏すればあらゆる尊敬すべき地位と安樂な生活を保障しようというあまりにも漠然とした内容であり<sup>(92)</sup>、これも具体的な枠組みを定めた協定と比較することはできないであろう。もしあえて比較をするのならば、その対象としてより適切なのは、本稿で取り上げた二つの政府側の和解条件であろう。上記協定の条項(1)はクーチェク・ハーンとジャンギャリーが政府の命令に従うことを明文化しているが、条項(2)から(4)がジャンギャリーの活動が「反乱」ではなく、「国民への奉仕」であると暗示することによって、条項(1)のジャンギャリーにとってのネガティヴな響きが相殺されている。現実的により重要なのは、ジャンギャリーの処遇に関わる問題である。1919年1月の最終提案がジャンギャリー部隊の解体と政府の意に添う配置転換を条件としていたのとは対照的に、この協定の条項(6), (7)および3項目の付帯条項の文面をみると、ジャンギャリー部隊はギーラーン地方のジャンダルメリーとしてそのままに維持され、しかもその長をクーチェク・ハーンが務め、その職務も彼らの本拠地のフーマン地区から開始されることになっている。政府軍の攻勢の前に内部分裂と敗退を重ねた後でのこの条件が、果たして「不利」といえるのであろうか<sup>(93)</sup>。

さらにジャンギャリーがこの協定を履行しなかったというシャーケリーの指摘もやや問題があるよう思う。というのは、この協定の8項目が確認さ

れた直後の1月23日以降、ラシュトに100名近いジャンギャリーチームが実際にジャンダルメリーとして勤務しているからである<sup>(94)</sup>。加えて、ラシュト駐在イギリス副領事バッターズが3月末にクーチェク・ハーンと会見した際に、クーチェク・ハーンはアーザリーがジャンダルメリーとして勤務する人員の確定と将来の予算、および協定の条項(5)に規定された弁済額の見積りを行なう委員会の設置のために、即刻代表を送るよう依頼してほしいと要請したという<sup>(95)</sup>。同じ副領事の判断によれば、協定がスムーズに実行されないのは、むしろ当局側の怠慢と資金不足が主な原因であった<sup>(96)</sup>。

筆者が協定の問題にこだわるのは、副領事が上のときクーチェク・ハーンの発言を聞いてからわずか2ヶ月後に、彼が中央政府ではなくアンザリー港に上陸したソヴィエト赤軍と協力関係に入ったからである。このことに関連して最近J・アーファーイーは、クーチェク・ハーンがボリシェヴィキを信頼することに誤って導かれたとする説に反論して、二つの根拠を提起している。第1はジャンギャリー運動は1919年に内部矛盾とイギリス・中央政府軍の攻撃で事実上終息していたこと、第2はクーチェク・ハーンが退勢挽回のため、若いイラン人コミュニストを採用していたことである<sup>(97)</sup>。第1の点はこれまでみてきたように、若干の修正を加える必要がある。自力でジャンギャリーが「ギーラーン共和国」を創出する可能性があったか否かはおくとしても、協定に示されるように他の選択肢は確かに実在したのである。したがって、むしろ注目すべきなのは2点目であろう。若いイラン人コミュニストの存在は今のところ史料上で確証できないが、ボリシェヴィキと共に鳴るジャンギャリーの左派グループがいたことは間違いない<sup>(98)</sup>。このグループの動向とクーチェク・ハーンの態度変更との関係については、運動の質的転換の問題を考えるうえで看過できない点であり、今後解明されるべき課題の一つであろう。

## おわりに

以上ジャンギヤリー運動と中央政府との関係を主軸に据えて、その変遷を通時的に辿ってきたが、ここでは近代イランにおける中央一地方関係のなかで、ジャンギヤリー運動が有していた意味を考えてみたい。

ガージャール朝が中央権力を掌握した18世紀末から19世紀を通じて、中央と地方の関係は、テヘランのガージャール宮廷および政権と、地方に派遣された王族や在地の有力部族家系との、いわば支配階層内部の権力闘争を基軸に展開してきたといつても過言ではない。19世紀が下るにつれ、中央の官僚機構が整備され、そのなかで育成された高級官僚が地方知事に任命されたり、同世紀後半以降、中央の権限を強化する改革が散発的に試みられたりしたとはいえ、テヘランで高値で州知事などの官職を獲得した王族や高級官僚が任地の徵税、治安維持、司法行政などの職務を一手に集中し、概して地方住民への榨取を強めるという基本的構造にはさほど大きな変化がなかった<sup>(99)</sup>。

このような構造に新しい変化をもたらそうとしたのが、20世紀初頭の立憲革命であった。革命の成果として公布されたイラン政治史上初の憲法(1906年12月の基本法と1907年10月の補則法)は、それまでの国王專制に制限を加え、国民の権利と義務を法的に明文化した。1906年10月に設立された国民議会には、その定数の約3分の1がテヘランに割り当てられたものの、地方選出の代議士も全国から出席した。また、1907年5月に同議会は、州アンジョマン法を制定し、直接選挙で選ばれた代表から構成される各州のアンジョマンに、州知事の行政を監視し住民の公益を擁護する役割を与えた<sup>(100)</sup>。こうして中央一地方の関係において、旧来の国王一州知事の権力構造と、国民議会一州アンジョマンのラインとが並立することとなった。とともに、旧体制に反発する地方住民は、当該地方の一員であるという意識のみならず、革命の過程で急成長を遂げたジャーナリズムを介して、権利主体者としての国民の一部であるとの自覚を強めるようになった。

1908年6月の国王による武力クーデタは立憲体制を一時的に機能停止に追い込んだ。これ以降、戒厳令下に置かれたテヘランよりも、むしろ「地方が首都の動向を決定づける」<sup>(101)</sup>状況が現出する。政府軍の重包囲攻撃に長期にわたって抵抗を示したタブリーズ蜂起に触発され、1909年2月ラシュトに武装蜂起が起り、またその前月にはバフティヤーリー部族軍がエスファハーンを制圧した。両武装部隊は連絡を取り合いつつテヘランを挾撃し、同年7月に立憲制を回復したのである。しかし1911年末にロシアが軍事干渉を行ない、イギリスもこれを黙認したために、革命は事実上終焉を迎えることになった。その後、憲法も議会も停止されるという約3年間の「絶対的反動期」を経て議会も再開されたものの、大戦の勃発とともに交戦国間の意向に翻弄された中央政府の権威は急速に低下していった。

以上の歴史的背景を踏まえて、中央一地方関係においてジャンギャリー運動をどのように位置づけることができるであろうか。まず注目したいのは、この運動が立憲革命の挫折のなかから出現してきたことである。以前にも論証したように、国民的政治=立憲制を草の根から再興し、6年前のラシュト蜂起のごとく地方から中央の政治状況を変革しようとする人々がこの運動を担っていたのである。そのことは、ギーラーンの地方権力を実質的に掌中にして以降に、ジャンギャリーが中央政権に突き付けた要求のなかにも、あるいはクーチェク・ハーンが国民議会の再開に最後まで固執し続けたことのなかにも読み取れるであろう。したがって、ジャンギャリーの理念や価値意識においては、ギーラーン地方の分離独立や文化的な固有性が重きを成していくのではなく、あくまでもイランという国家全体の独立や改革が、そしてムスリムの兄弟的な連帯が重視されていたのである。他方、中央政府の側は——たとえ彼らに同情的なモストウフィーオル・ママーレク政権であっても——彼らの地方行政への介入を、一貫して中央の権威への挑戦と受け取っていたのであり、和解条件が振幅したのはイギリスの政策や内外情勢の変動に規定されてのことであった。ジャンギャリーがギーラーンで実力をまだ保持し、イギリスとも和平条約を結んでいた時期には、かなり宥和的な条件を提

示し、イギリスが政策転換しジャンギャリーの内部亀裂が顕在化すると、対決色の濃い最終提案を示し、そして討伐作戦が貫徹できず北部からのボリシェヴィキの脅威が現実味を帯びてくると、一転して極めて妥協的な協定で合意したのもこのためであったろう。

しかし一方で、イギリス軍の存在がこの運動の進展を阻害する要因であったとしても、運動がギーラーン地方に主として限定されていたのも否定しえない歴史的事実である。このいわば理念と現実との乖離を論理的に説明するには、なお一層の検証を要すると思われるが、あえて若干の推論を行なうとすれば、次のようなことが指摘できよう。第1は、初期のエッテハーデ・エスラーム委員会のメンバーのほとんどすべて、そしてハージー・アフマドの支持者の大半がギーラーン出身者であったことである<sup>(102)</sup>。第2に、彼らの活動が主としてこの地方に繁茂する森林を舞台とし、そこで生活する農民層の支持に立脚していたということである。ジャンギャリーの「唯一の拠り所、避難所は農民階層であった」というギーラク・ホマーミーの言<sup>(103)</sup>は、そのことをよく物語っている。第3に、1919年2月にタブリーズのデモクラート党と協力するまで、「様々な時期に様々な地方で結成された、様々な政党に一度たりとも加わったことがない」とクーチェク・ハーンが語っている<sup>(104)</sup>ことが示すように、理由は必ずしも明らかではないがジャンギャリーが全国的な政治勢力と提携しなかったことである。第4に、彼らの主觀的願望とは別に、その活動範囲が結果としてアースターラーからアスターーバードまでのカスピ海南岸地域を大きく越えなかつたことである。これは、恐らく当時のイラン社会の分権的構造や地域経済圏の問題などとも絡み合っていると思われる。この問題の解明は、運動の全体像を把握するうえで不可欠の課題であるが、それ独自の分析を必要とするため、他日を期することにしたい。

[注] —————

(1) P. Dailami, "The Bolsheviks and the Jangali Revolutionary Movement 1915-1920," *Cahiers du monde russe et soviétique*, Vol. 31, No. 1, 1990/

- “The Bolshevik Revolution and the Genesis of Communism in Iran, 1917–1920,” *Central Asian Survey*, Vol. 11, No. 3, 1992//“Nationalism and Communism in Iran: The Case of Gilan, 1915–1921” (Ph. D. diss., University of Manchester, 1994).
- (2) C. Chaqueri, *The Soviet Socialist Republic of Iran, 1920–1921: Birth of the Trauma*, Pittsburgh and London: University of Pittsburgh Press, 1995.
  - (3) 黒田卓「第一次大戦期イランにおけるジャンギャリー運動(I)」(『香川大学教育学部研究報告第I部』第74号, 1988年9月)／同「第一次大戦期イランにおけるジャンギャリー運動(II)」(『香川大学教育学部研究報告第I部』第75号, 1989年1月)。以下、それぞれ「ジャンギャリー運動(I)」「ジャンギャリー運動(II)」と略記する。
  - (4) それらのうちで、注(6)に挙げたペルシア語文書集の解題については、黒田卓「ジャンギャリー運動にみる中央一地方関係：同運動関係ペルシア語文書集について」(『イランの中央と地方：研究動向・資料紹介・文献目録』アジア経済研究所, 1995年)を参照。
  - (5) M.A. Gilak Khomāmī, *Tārīkh-e Engelāb-e Jangal* [ジャンギャル革命史], Rasht: Nashr-e Gilakān, 1371Kh. [1992/93], pp. 17–19／黒田「ジャンギャリー運動(I)」72ページ注(8)。「ギーラーン共和国」の公共人民委員を務めたギーラク・ホマーミーの著書は、数多くの目撃証人のメモを載録しており、現在までに公刊されたペルシア語文献のなかで最も包括的で、情報の精度の高い第一級の史料といえる。この書を含むほとんどの史料が運動の開始期を1915年春としているにもかかわらず、シャーケリーが何らの根拠も明示せずにそれを1914年9月にしているのははなはだ不可解である。Chaqueri, *The Soviet Socialist*…, p. 52.
  - (6) F. Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e Eslām: Asnād-e Mahramāne va Gozāresh-hā* [ジャンギャル運動とエッテハーデ・エスラーム：秘密文書・報告], Tehrān: Enteshārāt-e Sāzmān-e Asnād-e Mellī-ye Īrān, 1371Kh. [1992/93], pp. 1–2.
  - (7) Gilak Khomāmī, *Tārīkh-e Engelāb-e*…, pp. 34–35.
  - (8) Resht News for the Week ending 8 January 1916, Foreign Office [以下FOと略記] 248/1149.
  - (9) Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e*…, pp. 6–18, 20–50.
  - (10) ibid., pp. 9, 13, 35.
  - (11) Resht News for the Period ending 24 June 1916, FO 248/1149//Despatch from Maclarens to Marling, 31 January 1917, FO 248/1168.
  - (12) Despatch from Maclarens to Marling, 28 November 1917, FO 248/1168.
  - (13) H.L. Rabino, “Les provinces caspiennes de la Perse, le Guīlān,” *Revue*

*du Monde Musulman*, Vol. 32, 1915/16, p. 63. なお1919年の見積歳入額は20万トマーンにも満たなかった。Memorandum from Edmonds to Cox, 31 October 1919, FO 248/1260.

- (14) この事件の詳細については、黒田「ジャンギャリー運動(I)」55~57ページ、参照。
- (15) Telegram from Maclarens to Marling, 30 October 1917, FO 248/1168.
- (16) Despatch from Eldrid to Cox, 25 September 1919, FO 248/1260.
- (17) Despatch from Maclarens to Marling, 31 January 1917, FO 248/1168.
- (18) Gilak Khomāmī, *Tārikh-e Enqelāb-e*..., p. 79.
- (19) Despatch from Maclarens to Marling, 13 February 1917, FO 248/1168.
- (20) 戦闘と和平の経緯については、黒田「ジャンギャリー運動(I)」57~58ページ、参照。
- (21) Despatch from Maclarens to Marling, 20 August 1917, FO 248/1168.
- (22) Despatch from Maclarens to Marling, 21 May 1917, FO 248/1168.
- (23) Despatch from Maclarens to Marling, 20 August 1917, FO 248/1168.
- (24) 黒田「ジャンギャリー運動(I)」66~67ページ。
- (25) Memorandum from Butters to Edmonds, 9 March 1920, FO 248/1292.
- (26) Despatch from Maclarens to Marling, 28 November 1917, FO 248/1168.
- (27) Despatch from Maclarens to Marling, 6 February 1918, FO 248/1203.
- (28) Situation Report No. 16 by Eldrid, 26 August 1919, FO 248/1260.
- (29) Despatch from Cox to G.N. Curzon, 9 May 1919, FO 248/1243.
- (30) Gilak Khomāmī, *Tārikh-e Enqelāb-e*..., pp. 135~136.
- (31) Despatch from Maclarens to Marling, 28 December 1917, FO 248/1168.
- (32) Despatch from Maclarens to Marling, 31 December 1917, FO 248/1168.
- (33) この人物の経験については目下のところ判明していないが、イギリス副領事は外事代理局長から入手した情報として、この者が「主要なジャンギャリー・エイジェントの一人」であることを公使に通知している。Telegram from Maclarens to Marling, 27 February 1918, FO 248/1203.
- (34) Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e*..., pp. 64~67.
- (35) ibid., p. 57.
- (36) ibid., p. 81.
- (37) ibid., pp. 69~71.
- (38) Telegram from Cox to Foreign Office, 14 February 1919, FO 248/1243.
- (39) Gilak Khomāmī, *Tārikh-e Enqelāb-e*..., pp. 99~100.
- (40) 黒田「ジャンギャリー運動(II)」45~49ページ。
- (41) Despatch from Maclarens to Marling, 14 February 1918, FO 248/1203.
- (42) Telegram from Maclarens to Marling, 28 January 1918; Telegram from

- Maclarens to Marling, 11 February 1918, FO 248/1203.
- (43) この人物は1918年3月頃にテヘランのジャンギャリー代表の仲介でジャンギャリー運動に合流したようである。Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e*…, p. 87. アメリカで教育を受け、英語が堪能であったため、イギリスとの折衝の窓口となっていたが、後に述べる政府軍の軍事作戦の直前、イギリス当局の手引きでテヘランへ逃亡した。州税務局長の職を委ねられていた彼は、このとき8万4000トマーンのジャンギャリーの資金を携帯したといわれる。E. Fakhrā'i, *Sardār-e Jangal: Mirzā Kūchek Khān* [ジャンギャルの司令官：ミールザー・クーチェク・ハーン], 5th ed., Tehrān: Sāzmān-e Enteshārāt-e Jāvidān, 1354Kh. [1975/76], p. 97.
- (44) これはミールザー・レザー・ハーン自筆のジャンギャリー運動回想録ともいいうべき文書の一節である。文書はFO 248/1243に収録されているが、タイトル、日付の記載はない。ただしファイルに収められた箇所から推して、1919年5月頃に作成されたものと思われる。
- (45) Telegram from Marling to Foreign Office, 23 April 1918, FO 248/1203.
- (46) Telegram from Maclarens to Marling, 21 May 1918, FO 248/1203.
- (47) L.C. Dunsterville, *The Adventures of Dunsterforce*, 2nd ed., London: Edward Arnold, 1920, p. 191.
- (48) Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e*…, pp. 97-99. イラン外務省宛1918年5月27日付書簡。すぐ後に述べるイギリス副領事と帝国銀行支店長のラシュトからの脱出を助けたのも、このアルメニア人赤軍であったとビチエラホフ軍を代表してジャンギャリーとの交渉に臨んだ前オルーミーエ駐在ロシア領事ニキティンは記している。B. Nikitine, *Irānī ke Man Shenākhte-am* [私の知っているイラン], trans. Homāyūn Sābeq, Tehrān: Kānūn-e Ma'refat, 1329Kh. [1950/51], pp. 305-306.
- (49) Telegram from Maclarens to Marling, 19 February 1918, FO 248/1203.
- (50) Intercepted Telegraphs to and from Ministry of Interior, No. 5 from Karguzar Resht, dated 13 March 1918, FO 248/1202.
- (51) Despatch from Moir to Marling, 21 August 1918, FO 248/1203. ペルシア語版テクストについては、例えば、Gīlak Khomāmī, *Tārikh-e Engelāb-e*…, pp. 187-188.
- (52) Despatch from Moir to Marling, 2 September 1918, FO 248/1212.
- (53) Telegram from Moir to Cox, 13 October 1918; Telegram from McDonell to Kennion, 15 October 1918, FO 248/1203.
- (54) Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e*…, p. 113. 州知事からイラン内務省宛1918年10月7日付書簡。
- (55) ibid., pp. 117-118.

- (56) Despatch from Moir to Cox, 15 October 1918, FO 248/1203.
- (57) Memorandum from Kennion to Cox, 22 October 1918, FO 248/1203.
- (58) Telegram from McDonell to Kennion, 15 October 1918, FO 248/1203.
- (59) 1865年頃にキャスマーに生まれる。もともとは反物商であったが、ラシュトでの絹取引への投機で富裕な商人になるも、1911年頃破産し故郷に戻る。その反ロシアの心情から運動草創期のクーチェク・ハーンに協力を惜しまなかつた。*Military Report on Tehran and Adjacent Provinces of North-West Persia (including the Caspian Littoral)*, General Staff Mesopotamia, 1921, India Office, L/MIL/17/15/23, pp. 387-388.
- (60) Letter from Oakshott to General Officer Commanding Kazvin, 18 September 1918, FO 248/1203.
- (61) Despatch from Oakshott to Cox, 26 October 1918, FO 248/1203.
- (62) Telegram from Cox to Kennion, 29 October 1918, FO 248/1203.
- (63) Memorandum from Kennion to Cox, 22 October 1918, FO 248/1203.
- (64) Despatch from Cox to Oakshott, 21 November 1918, FO 248/1203.
- (65) Memorandum from Kennion to Cox, 20 November 1918; Telegram from Oakshott to Cox, 6 December 1918, FO 248/1203.
- (66) Telegram from Oakshott to Cox, 28 December 1918, FO 248/1203.
- (67) Telegram from British Legation to Norperforce Kazvin, 20 January 1919, FO 248/1243.
- (68) Telegram from Cox to Foreign Office, 14 February 1919, FO 248/1243.
- (69) Note by Wickham on the Jangali Situation, 10 February 1919, FO 248/1243.
- (70) ibid.
- (71) Telegram from Wickham to Political Officer Baghdad, 25 February 1919, FO 248/1243.
- (72) Resht Situation Report No. 4 by Eldrid, 27 February 1919, FO 248/1260.
- (73) Telegram from Wickham to Cox, 3 April 1919, FO 248/1243.
- (74) Telegram from Cox to Wickham, 4 April 1919, FO 248/1243.
- (75) Despatch from Eldrid to Cox, 4 April 1919, FO 248/1260. この通信にイギリス軍布告のペルシア語原文と英語訳、およびペルシア語リーフレットが添付されている。
- (76) Telegram from Wickham to General Officer Commanding Kazvin, 28 March 1919, FO 248/1243.
- (77) Translation of Intimation to Mirza Kuchik Khan and the Ittihad-i Islam of Gilan, FO 248/1243. この通告のペルシア語テクストについては、例えば、*Gīlak Khomāmī, Tārikh-e Engelāb-e*…, pp. 195-197.

- (78) Resht Situation Report No.5 by Eldrid, 6 March 1919, FO 248/1260. これはイギリス当局がインターセプトした, 1919年2月19日付のテヘランのシェイフ・モハンマド・ハサン・ラシュティーなる者からドクトル・ヘシュマト宛てた書簡中に出てくる。
- (79) Report by Wickham, 6 May 1919, FO 248/1243.
- (80) Gilak Khomāmī, *Tārīkh-e Enqelāb-e...*, p. 202/S. Kūchekpūr, *Nahzat-e Jangal va Ouzā'-ye Farhangī-Ejtemā'i-ye Gilān va Qazvin* [ジャンギャル運動とギーラーン・ガズヴィーンの文化的・社会的状況], ed. M.T. Mir Abol-Qāsemī, Rasht: Nashr-e Gilakān, 1369Kh. [1990/91], p. 21.
- (81) Report by Wickham, 6 May 1919, FO 248/1243.
- (82) エフサノッラー・ハーンは1883年頃マーザングラーン州サーリーの貧しい家庭に生まれた。シャーケリーによれば、バハイー教徒の家庭だったという。Chaqueri, *The Soviet Socialist...*, p. 461. 縁戚者の後援で、テヘランの高等教育機関ダーロル・フォヌーン校で教育を受け、立憲革命期の北部からテヘランへの進軍にも参加した。1918年の初めに、テヘランの反英的テロリスト・グループ「懲罰委員会」の一員となつたが、同年夏の摘発により、マーザングラーンに逃亡し、ジャンギャリーに加わった。彼のロシア語による回想録に関しては、伊藤秀一「エフサヌッラー・ハンの『回想』について」(『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』同朋舎出版, 1978年)に詳しい。一方、ハールー・ゴルバーンは1876年頃ケルマーンシャー近傍のクルド人家庭に生まれ、テヘランで数年間有力者の下男を務めた後、ガズヴィーンやギーラーンで生計を立てるトラガカント・ゴム採集業者になり、1918年にハージー・アフマドの部隊に加わった(Gilak Khomāmī, *Tārīkh-e Enqelāb-e...*, pp. 23-24, よりれば、1916年頃、7, 8人のクルド人農業季節労働者とともにジャンギャリーに合流したという)。ハージー・アフマドの降伏に際して、クーチェク・ハーン側に加わり、クルド部隊を率いた。この両名はやがて「ギーラーン共和国」の立役者となるであろう。以上の情報は主に、*Military Report on Tehran...*, pp. 388-389, による。
- (83) Telegram from Wickham to Cox, 11 July 1919, FO 248/1243.
- (84) Report from M.C. Warren to Eldrid, 24 August 1919, FO 248/1243/Situation Report No. 16 by Eldrid, 26 August 1919, FO 248/1260. Gilak Khomāmī, *Tārīkh-e Enqelāb-e...*, pp. 250-251, にクーチェク・ハーン自身が後年ある人物に語ったこの旅の話が収められているが、話の粗筋はイギリス側がモニターしていたものとほぼ一致する。旅の目的はボリシェヴィキの実態を見聞しようというものであったが、アゼルバイジャン政府軍との戦闘のためボリシェヴィキが撤退していたので、会見は実現しなかった。
- (85) Resht Situation Report No.20 by Eldrid, 23 September 1919; Enzeli

Situation Report No. 3 by Warren, 12 October 1919; Situation Report from Resht No. 29 by Butters, 8 November 1919; Situation Report from Resht No. 33 by Butters, 11 December 1919, FO 248/1260. イギリス当局はエスマール・ハーンの動向をバクーの諜報機関とも連絡を取りながら監視していたが、それによれば彼は8月頃にバクーに出向き、ティフリスを経て11月初めにいったんキャスターに戻り、再度12月初旬にバクーへ出発したらしい。しかしGilak Khomāmī, *Tārīkh-e Enqelāb-e…*, pp. 254-257, に収載されたエスマール・ハーン自身の手になるザカフカース出張に関する覚書では、1919年8月初めに旅立って以来、ジャンギャリーと中央政府との和解が成立する8ヵ月後までザカフカース各地に潜伏していたと記されている。いずれにせよ、彼はバクーとティフリスでボリシェヴィキに「イランの状況はロシアとは異なっており、ボリシェヴィキの原則による革命はイランでは不可能」と説いたが、受け入れられるところとはならなかったようである。

- (86) イギリスはボリシェヴィキの浸透を水際で防止するために情報収集に余念がなかったが、それらのうちの一例のみを以下に示しておく。イギリス当局は1919年8月初めにアフォニアン(S. Afonian)に託された2通の信任状を差し押された。1通は同年7月17日付のイラン共産党「アダーラト」名のもの、2通目は日付はないが「友人ミールザー・クーチェク・ハーン」に宛てアフォニアンを代表として紹介するレンコラーンのボリシェヴィキからのものであった。Memorandum from Eldrid to Intelligence Baku, 6 August 1919, FO 248/1243. このアンザリーでかつて採取船操舵手として働いていたアフォニアンは、秋にはアンザリーに機械製造店を開き、ここをアジトにバクーの労働者委員会から指示と資金を受け、クーチェク・ハーンのためにリクルート活動を行なっていたという。Telegram from Warren to Edmonds, 8 November 1919, FO 248/1243.
- (87) Telegram from Edmonds to Cox, 17 October 1919, FO 248/1243. 州代理知事がイラン内務省に宛てた1919年12月2日付報告書では、10月23日現在でジャンギャリーの勢力は453名の武装兵と200名ほどの非戦闘員であったが、政府軍との2度の戦闘を経て252名の武装兵と69名の非戦闘員に減ったと述べられている。Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e…*, pp. 132-133.
- (88) Memorandum from Edmonds to Cox, 15 October 1919, FO 248/1243.
- (89) Resht Situation Report No. 13 by Eldrid, 18 July 1919, FO 248/1260.
- (90) Translation of Agreement between Mirza Ahmad Khan Azeri, Acting Governor of Gilan by the order by the Persian Government and Mirza Kuchek Khan, FO 248/1292. なお、ペルシア語原文も添付されており、訳出にあたっては併せてそれも参照した。
- (91) Chaqueri, *The Soviet Socialist…*, pp. 172-173.

- (92) Gilak Khomāmī, *Tārikh-e Engelāb-e*…, pp. 238-239.
- (93) 1919年3月末のアーザリーの州代理知事職解任後、この協定条項を土台に中央政府とジャンギャリーとの間の和解を最終的に成立させた州司法局長サドル・アシュラーフの判断も、この協定の「全条項がクーチェク・ハーンに有利である」というものであった。Mohsen Sadr (Sadr ol-Ashraf), *Khāterāt-e Sadr ol-Ashraf* [サドル・アシュラーフ回顧録], Tehrān: Enteshārāt-e Vahid, 1364Kh. [1985/86], pp. 244-245.
- (94) Telegram from Butters to Cox, 24 January 1920, FO 248/1292/Kashāvarz ed., *Nahzat-e Jangal va Ettehād-e*…, p. 157. 州代理知事からイラン内務省宛の1920年1月21～23日の状況報告書。
- (95) Telegram from Butters to Edmonds, 27 March 1920, FO 248/1292.
- (96) Memorandum from Butters to Edmonds, 9 March 1920; Telegram from Butters to Cox, 29 March 1920, FO 248/1292.
- (97) J. Afary, "The Contentious Historiography of the Gilan Republic in Iran: A Critical Exploration," *Iranian Studies*, Vol. 28, Nos. 1-2, 1995, p. 12.
- (98) ジャンギャリーの内部に「ボリシェヴィキ委員会」(後には「社会主義者委員会」と呼ばれる)というグループが結成されたといわれるが、ただしクーチェク・ハーンはこれに加わることを拒絶した。Resht Situation Report No. 2 by Eldrid, 20 February 1919; Resht Situation Report No. 3 by Eldrid, 22 February 1919, FO 248/1260. エルドリドがあるインフォーマントから仕入れた情報によると、ジャンギャリーの内部で「戦闘的分子が優勢となり、クーチェク・ハーンは彼らを統制できずに集団を統率するため彼らの行動を大目に見ざるをえない」状況であったという。Situation Report No. 16 by Eldrid, 26 August 1919, FO 248/1260.
- (99) 19世紀における中央一地方関係については、A.R. Sheikholeslami, "The Patrimonial Structure of Iranian Bureaucracy in the Late Nineteenth Century," *Iranian Studies*, Vol. 11, 1978/Sh. Bakhsh, "Center-Periphery Relations in Nineteenth-Century Iran," *Iranian Studies*, Vol. 14, Nos. 1-2, 1981.
- (100) 州アンジョマン法とギーラーン州のアンジョマンについては、黒田卓「イラン立憲革命と地域社会—ギーラーン州アンジョマンを中心に—」(『東洋史研究』第53巻第3号, 1994年12月)。
- (101) E. Abrahamian, *Iran between Two Revolutions*, Princeton: Princeton University Press, 1982, p. 97.
- (102) エッテハーデ・エスラーム委員会の構成メンバーの分析については、黒田「ジャンギャリー運動(I)」62～63ページ。1918年夏にジャンギャリーに加わったクーチェクプールによれば、クーチェク・ハーンの部隊には非ギーラーン出

身者 ('Erāqī) が多く、ギーラーン出身者 (Gīlak) が少なかったのに対し、ハージー・アフマド率いる不正規兵のほとんどはギーラーン出身者であった。Kū-chekpūr, *Nahzat-e Jangal va Ouzā'-ye*…, pp. 16-17.

(103) Gilak Khomāmī, *Tārikh-e Engelāb-e*…, p. 57.

(104) Resht Situation Report No. 4 by Eldrid, 27 February 1919, FO 248/1260.